

# ケース・ディスカッション授業の 教育効果を高める取組み事例に関する一考察

## A Consideration of the Efforts to enhance the Educational Effect on the Case Discussion Teaching

西尾 範 博\*  
Norihiro Nishio

### アブストラクト

本稿はケース・ディスカッション授業の実際を描写した事例研究である。とりわけ教育効果を高めるための試みを7つ取り上げ、考察を考える。7つの試みは、学生の個としての成長とクラスとしての成長、すなわち学生が教員とともに授業内容を通じて学んだり成長したりする機会と、他の受講学生とともに授業内容を学んだり成長したりする機会を提供する上で重要な役割を果たしていると結論づけた。

キーワード： ケース・ディスカッション授業、事例研究、学生の個としての成長、クラスとしての成長

### 1. はじめに

本稿の目的は、ケース・ディスカッション方式をとる授業の実際を取り上げ、教育効果を高めるためのいくつかの試みについて考察することにある。その際、担当教員の行動とその背景にある意図や心理をやや詳細かつ具体的に描写するという方法をとる。その点で、広義には大学授業のあり方についての一つの事例研究を企図したものであるが、とりわけケース・ディスカッション方式をとる授業の事例研究を企図したものである。ただし、本稿はケース・ディスカッション方式をとる授業を担当する教員の一事例を示すものであって決してモデルを示すことを意図したものではない。

ここで取り上げる授業「人間関係論」は、一年次から履修可能な半期2単位の人間文化科目で、

---

\*流通科学大学商学部 教授

〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

流通科学大学の全学共通科目である。ここ数年は月曜日の3～4時限目に2コマ連続で7回の授業を行っている。学生によるディスカッションの連続となる授業であるため、その教育効果を高めるために40名という定員設定で事前登録制をとっている。通常、前期で約70名、後期で約60名の申し込みがある。定員を超えた場合は抽選としているが、抽選の際には、学年、学科、性別などが多様になるように配慮している。そのために「友人に誘われて一緒に申し込んだのに友人が抽選からもれて一人で履修することになった」という学生も毎回全体の1～2割ほどいる。また留学生や科目履修生などの社会人の申し込みには全体のバランスを考えつつも優先的に含めるようにしている。

ところで、一般的にケース・メソッド、あるいはケース・ディスカッションが目指すものは、ある概念なり考え方を具体的なケースを議論する中で身につけたり、応用したりすることである。そしてその過程で、ともに議論しあう相互関係のなかで人間的側面も学ばされるとされている。それに対して、この授業では、概念や考え方の習得や応用という点については、詳細は別項に譲ることにするが、授業全体を通じて学生が体験的に習得するようにして、授業目標として明示せずに授業中も最終回まで積極的に取り上げない。そのため、学生にしてみれば特定の概念を習得したという感覚は最終回の授業を終えるまで得られない。体験的に習得するためである。この授業はこのようなかたちで、授業目標（資料1参照）に明示したとおり、後者の人間的側面に重きをおいている。一般にケース・メソッドと聞いて最初に想起されるのは、ケース、そしてそれを教材としたディスカッション、さらにディスカッションをリードし、マネジメントする教員などであるが、それだけではない。また、ケース・ディスカッション方式の授業では、ケースを読ませ課題を与えて考えさせ、グループ・ディスカッションをさせて少人数で議論させ、クラス・ディスカッションでさらにさまざまな観点から議論を深めるといったことをして終わりではない。とりわけ、この「人間関係論」の場合、概念や考え方はもちろんのこと、学生がケースを議論するということそのものが一つの生のケースとなって、学生はその日のケースを議論しながら体験的に概念や考え方を身につけていく。学生一人ひとりが議論しあう相互関係の中で人間的側面を学んでいくというのは、このようなことを意味している。

なお、以下で考察では2006年5月29日に行った授業を中心に取り上げている。前期の授業は4月10日に授業の目標、特徴、日程、進め方（資料1参照）についてオリエンテーションと、若干のデモンストレーションを兼ねた「孤立する男子学生」というケースを使ったディスカッションを行い、発言は自ら挙手して行うこと（「自らの道を自らの力で切り開きましょう」と伝える）を含め、この授業のイメージを持たせるようにした。2回目の5月1日には「無人島にもっていくもの」「『カッコいい』とは何か」の二つのケースを使って、各人の選択や回答をもって2～3名の少人数グループをつくり、約10分に一度メンバーの一人が次々にグループを移動していくようにしてディスカッションを行わせ、一人あたり5～6名の学生たちと交流の機会がもて

るようにした。それをもとに15日の授業では、「辞めるべきか続けるべきか」というケースを使って、ケースの人間及び人間関係についての理解を深めながら、この授業のディスカッションではディベート方式をとらないことを実際に体験させることにより、学生全員で同じケースについて創造的かつ相乗効果的な思考を実感する機会とした。また、「理解してから理解されよ」という話をして、自分の考えをまとめつつも、人の考えにも耳を傾け、理解することの大切さを次のように説明した。「きょうの授業をより実り多いものにするために最初に一言。皆さん、きょうでこの授業も3回目になる訳ですが、人とディスカッションすることに少しはなれてきたでしょうか。ところで、『理解してから理解されよ』という言葉をご存知ですか。例えば、皆さんは、自分の話をちゃんと聞いてくれない、そういう人の話を聞く気になれますか。・・・NOですよ。だから、自分の発言に耳を傾けてもらいたかったら、まずは人の発言に耳を傾けることが大切になります。この時間、自分以外の36人(抽選で設定定員の40名にしたが履修登録をして出席しない学生が3名いた)の人の意見に耳を傾けることはたしかに容易なことではありません。だって、自分にも自分なりの考えや捉え方があるわけで、それとは別に他の人の考えにも耳を傾けるには相当なエネルギーが必要になります。しかし『理解してから理解されよ』を実践することによって、いっそう豊かな見方や捉え方、新しい発見、アイディアも生まれるものです。そして、ディスカッション全体がいっそうすばらしいものになります。じょうずに他の人の考えに耳を傾けながら、自らの考えもまとめ、じょうずにタイミングを見計らって発言するようにしてくださいね。そのためのサポートは僕自身ベストを尽くしてします。いつもいっていることですが、教室ではとにかく練習です。練習、練習。みんなで練習しましょう」。

そうしてクラスの学生にもディスカッションにもそれぞれの学生がある程度なれたところで行う第4回目が5月29日の授業であった。

## 2. ケース・ディスカッション授業の一事例

### 2-1. 学生の様子

「12時55分。そろそろ教室に向かおう」とあらかじめ用意しておいた荷物、すなわち今日の授業(全7回中4回目)に必要なもの、すなわちケースのプリント40人分、受講者のネームカード37人分と自分のネームカード、デジタルカメラ一台(授業後に板書内容を撮影保存する)、A4サイズの白紙数枚、B6サイズの罫線入り用紙40枚、黒、青、赤三色のホワイトボード用のペン一本ずつを入れた茶色のケースをもって研究室を出た。

研究室から教室(5212教室、60名定員の扇形階段状教室)まで、ゆっくり歩いておよそ3分。たいてい、途中で顔見知りの学生を見かけ、「ちは!」「元気?」「これから授業? 頑張っ」などと声をかけたり、1~2分立ち話をしたりしながら進むので、教室には授業開始の13時ちょうどに到着する。教室の前まで来ると、まず扉のガラスのスリットから中をさりげなくうかが

う。出席している学生のおおよその数、学生が元気そうか否か、笑っている学生がいるか否か、誰と誰が話しているか、その他何をしているかに目をやる。その間わずか5秒程度。通常の講義形式の授業の場合、授業の成否は教員と学生の半分ずつにかかっているが、学生のディスカッションを中心に進めるこの授業の成否の大部分は学生にかかっているため、学生の様子にはとくに敏感にならざるを得ない。遅刻は授業の雰囲気を変えないよう10分以内と初回の授業で厳しく伝えてあり、昼休み直後の授業であるため遅刻は皆無だが、学生はただ出席すればよいのではなく、元気でなければならない。とはいえ、ディスカッションの途中で眠ってしまう学生もたしかにいる。その場合は、クラス全体の雰囲気を壊さないよう、また他の学生の集中を切らさないよう、誰かの発言を聞きながらただ単に歩き回っているといた感じで、眠っている学生のところへそっと移動し、肩を軽く叩いて小さな声で「〇〇君、寝てるぞ」あるいは「体調がすぐれないのだったら保健室で休んだらどう？ここで寝ると授業の雰囲気を壊しているから」と伝えて積極的に起こしにかかる。また、横に友人が座っていれば、議論の合間にその学生に「隣の友達を起こしてくれる？」ということによって、議論で張り詰めたクラスの雰囲気を和らげるようにする。

さて、教室には、「ちはあ〜」と大きな声で明るく入っていく。教室中央の教卓にゆっくりと向かいながら教卓に荷物をおくまでの数秒間で、「ちは、ちは、ちは。ちは、ちは、ちは」と大急ぎで挨拶しながら、学生たち一人ひとりと目を合わせるようにし、全員の反応をうかがう。こちらにしっかりと目を合わせて元気そうな学生、姿勢のよい学生、にこにこした学生は、この授業を始めるにあたって非常に貴重な存在となる。しかし、なかには眠そうな顔をした学生、また眠っていたが私の声で起きだした学生、いかにも疲れているといった様子を示す学生も毎回4名（全体の10%）ほどいる。そうした学生は、私にとって一つのチャレンジとなる。きょうの授業を終えるまでに元気を取り戻させ、「やっぱり出席してよかった」と思わせるのが目標となる。その達成度はおよそ5割。要するに、うまくいくこともあるが、うまくいかないこともある。

## 2-2. レポート

教卓に置いた荷物の中から、まずは自分のネームカードを教卓に出し、次に学生のネームカードを取り出し、最前列の机の上に、学生から向かって左手から男子18名分、その後女子19名分、「各自、取って行って」と、ざあっと並べる。その後、私は教室内の室温を空調パネルでチェックし、場合によっては学生に「どう？暑い？」とたずねることもする。学習環境を整える上で、教室内の室温も非常に重要な要素となるからである。その後、ケースを配る準備や前回の授業を振り返ってのコメント、前回提出のレポート（A4サイズの紙一枚に表に「きょうの授業を振り返って」、裏には「きょうの課題」をまとめさせる。いずれも40字×30行で1200字程度ずつ、ワープロ打ち）についてのコメントを行う準備をする。この日は4名欠席、いずれも3年生男子。出席者は1年生男子6名女子8名、2年生男子6名女子6名、3年生男子3名女子3名、そして

科目履修生の女子留学生1名の合計33名。

この授業では試験はせずに毎回レポートを課す。そのレポートを成績評価の40%としている。かつてその割合を60%としていた時期があった。しかし授業中に全く発言しないで、レポートの内容を充実させようとする学生が全体の半分以上もいたので、レポートの評価割合を減らし、あくまでもディスカッションにどれだけ参加、貢献したかを重視して、授業中の発言や参加度（可能な限り授業中に後述の「座席表」に記号で記入しておくようにしている）に対して成績評価の60%を与えている。そうして、レポートも大事だが、それ以上に授業中に力を注がねばならないようにした。ただし、それでもなお、発言が思うようにできないためにレポートにその分時間とエネルギーを注いでいるという印象を受ける学生が2割ほど存在する。そうした学生からは、「ほんとうは発言したいのだが、まだまだ思うように発言できないで苦しんでいるので、せめてレポートだけは充実させたい」という思いの表れと捉え、発言できるようサポートすることをさまざまな機会に見いだすようにしている。

このレポートの作成は、学生にとって実際のところ大変なようで、「この科目は、試験がないのでうれしいが、毎回のレポート作成は大変だ」と何度か聞く（そのたびに、「いい練習になっているということだね、頑張って」「毎回、楽しみにしているからね」とにこやかに返すようにしている）。さらに、レポートの大変さは、2006年度前期授業改善アンケートの結果に表れていると考えられる。つまり、「この授業を理解するために時間外でどの程度勉強しましたか」をみると、5段階評価（よく勉強した＝5、どちらかといえば勉強した＝4、どちらともいえない＝3、どちらかといえば勉強しなかった＝2、勉強をしなかった＝1）で全学平均が3.26であるのに対し、この授業は4.09と明らかに高い（私としては4.5以上を希望している）。ちなみに、火曜日5時限目開講の、ごく一般的な講義形式の「生涯学習論」では、宿題やレポートを合計3回しか課さないためか、その割合が3.52と平均値に近い。

### 2-3. ネームカード

前回の授業やレポートについてのコメントを行う準備をしながら、ネームカードを受け取った学生がその内側に書かれたコメントに目を走らせている様子を、「例によって手書きのため、読みにくい字、読めない字、その他僕の勘違いなどがあつたら遠慮なくいって」といいながら、可能な限り確認する。山折にして使うネームカード（18.2cm×25.8cm）の内側には、7個ずつ2段になった正方形の升目合計14個が、折り目の両側にそれぞれ印刷されている。その片方の14個のうち、毎回2マス（3.2cm×6.4cm）を一回分として、日付、出欠、前回提出のレポートの成績、そしてそのレポートの出来栄や授業中の発言などについて学生個人々に宛てたコメント（スペースの関係上、80字前後）を手書きで記入している。学生たちは一人の例外もなく全員が、前回のレポートの評価（通常、B、B+、B++、A-、A、A+、A++、A+++、Ⓐ-、Ⓐ、Ⓐ+、Ⓐ++、Ⓐ+++のいずれかで評価している）を気に向け、自分自身に宛てられたコメン

トを楽しみにしている。

授業中の発言やレポートに関するコメントを記入する際には、一人ひとりのレポート内容や授業中の発言などに即したコメントになるよう心がけつつ、できる限りよい点を見いだしほめたり励ましたりすることと、学生にとって今後の課題となることを示すことを基本としている。具体的にいくつか例をあげると、以下の通りである。

- ・『「いろんな考えが思い浮かんでまとまらない』と苦しんでいるようだけど、まとまらなくなるほどいろんな考えが思い浮かぶことはすばらしいこと！ まとめようと無理せず、とにかく思うことを発言してみよう。そうすれば何かヒントになるようなことを誰かが発言してくれるだろうから」。
- ・『「～すればよい』『～すべきだ』というのは簡単なんだよねえ・・・それで終わらず、なぜ主人公にはそうできないのか、主人公の目には事態がどのように映っているのかを考えてみよう。そうすればもっと視野が広がるよ。さぁチャレンジしてみよう」。
- ・『「全体的にバランスのとれたすばらしい内容でした。そして『同意できなくても理解はできる』と『いろんな可能性を考えることは楽しい』がすばらしかった！』。

また、初回の授業で、自己紹介をA4用紙にワープロで自由に書いてもらった際に、この科目の履修理由や動機などについても含めることとしているので、それぞれの学生の授業に対する期待や学生自身の目標に即した形でコメントする。例えば、「毎回ベストを尽くしてスキルアップ、成長につなげたい」と書いた学生には、レポートに関するコメントと一緒に「毎回ベストを尽くしてスキルアップ、成長して行ってくださいね。期待しています」と書き加え、「できるだけ発言するようにしたい」と書いた学生には「どんどん発言してくださいね。楽しみにしています」と書き加えた。また、「(ディスカッションしていると)頭に血が上っていく心地よい感じがした」と書いた学生には「頭に血が上っていく心地よい感じ」＝すばらしい！ 今後がますます楽しみです。どんどん発言の練習をしましょう」と書き加え、「気がついたら必死にしゃべっている自分がいて、自分でも驚いた」には「『必死にしゃべっている自分がいて、自分でも驚いた』という経験ができてよかったですね！ 毎回、新しい発見をし、いろんなことを得て行ってくださいね」、また「ついに発言。目標達成！」には「目標達成＝おめでとう！ 発言するって気持ちいいものでしょ!? これからもどんどん発言して行ってください!! 楽しみにしています」と書き加えた。なお、記入した毎回のコメントを読むと、時系列で学生一人ひとりの経験のある程度把握することができる。その一例として、熱心に取り組みつつもクラス・ディスカッションで発言するまでに比較的時間を要した二人、小林大地君(仮名)と中山優子さん(仮名)の事例を資料2で取り上げる(\*なお、いずれも7月3日の最終回分は無記入。この無記入分については、どのようなかたちで学生にフィードバックすればよいかを現在検討している。また、授業内容で中心となる概念や考え方にかかわる部分の記述は省いてある)。

なお、ネームカードの内側にコメントを記入する際に私が最も気を配っている点は、学生がコメントを読み終えたときに、学生の自己評価（「前回の授業ではうまく発言できた」「前回のレポートには相当力を注いだ」、あるいはその逆といった学生自身の記憶や印象）と教員である私の評価との間に大きなギャップがないと感じられることと、「よし、次も頑張るぞ」「今日こそ発言するぞ」「次はもっとよいレポートにしよう」「今日はもっといろいろな視点から考えてみよう」という気になれるようにすること、そして何よりも「先生と私との間で個人的な交流が図れている」と実感させることである。この個人的な交流については、決して直接的なやりとりを避けている訳ではない。むしろ積極的に話しかけていくようにしている。しかし、直接的なやりとりといっても授業中のそれには限界があるので、ネームカードの内側を使った交流というように、交流のチャンネルを少しでも多様にできればと考えている。

さらにそれが「個人的な交流」というのにふさわしいものになるよう、学生には、山折の反対側の14個の升目を使って、私のコメントに対するコメントや、レポートに書くにはふさわしくない事柄について、コメントを読んだ直後に記入するよう推奨している（義務づけている訳ではないので、実際に希求する学生は全体の1～2割程度）。実際、「今度の日曜日に試合があります。最近、厳しい練習が続き、疲れ気味ですが、きょうの授業も頑張ります」（それに対して私からは「結果をまた教えてくださいネ。勝てることを祈っています」と記す）「もうすぐで自動車の免許がとれそうなんです」（それに対しては「楽しみですね。あと少し頑張ってください！）」「みんな結構発言しますね、ビックリしました」（「あなたの発言も楽しみにしていますよ！ 教室は練習の場。さあ練習、練習！」）といったことが記入されている。

#### 2-4. 「今日の目標」

学生がディスカッションにある程度慣れてくる4回目の授業あたりから、「今日の目標」をネームカードの内側に記入する時間をとっている。例えば、5月29日の記入には以下のようなものがあつた。「少なくとも一回は発言をする！！」「人の発言をよく聞いて何かを発見する！」「周りの意見に耳を傾け、他人の思ったことを共有する」「相手の話を十分理解してから自分の意見を述べる」「最初に思った一つの考えだけに左右されないこと」「様々な角度からケースを眺めること」。その意図は、学生が教室に入ったときと出ていくとき（授業の前と後）とではどんなちがいがあるか、学生の内面にどんな変化があつたか、学生は何が得られたか、何が身についたか、どんなことを考えたかを重視し、いうなれば、教室を出たときに「心の持ちようが少しちがっている」「周囲の人の見え方がちがっている」「景色がちがってみえる」といったことを起こしたいと考えているので、目標を文字にして、それを達成することにある。

教員に促されてのこととはいえ、学生自らが目標をあらかじめ設定するという作業は、その日の授業中の過ごし方を自らで決意することになり、そのことは、いい意味で自らにプレッシャーをかけ、適度な緊張感をもって目標達成のために努力をするのに十分な動機となる。一人ひとり

にとっては周囲の学生たちがどうであれ、周囲に強制されることなく、ただただ自分の目標に向かって努力する。自分自身を裏切らないよう努力する。このように、その日の目標を文字にすることは、授業中の取り組み度合いにも想像以上に効果がある。ただし例外もある。あまりに高い目標を立てすぎて失敗する学生やあまりに低い目標を立てて失敗する学生もいる。それもまた本人にとってはよい経験であるが、2006年度前期のこの授業においても、その両方のケースがみられた。前者の例としては「今日のクラス・ディスカッション中に3回発言する」と書いたが一度も発言できなかった学生は次の時間に「少なくとも1回は発言する」と書いた。後者の例では「低い目標では意味がない。もっと自分を成長させたいので今度からは目標を高く立てるようにしたい」とあった。

## 2-5. 前回から今回への授業の橋渡し

学生全員がネームカードの内側のコメントを読み終えたり、コメントや目標を書き終えたりして落ち着くタイミングを見計らって、前回の授業や学生のレポートを振り返ってのコメントを若干行う。例えば5月29日の授業では次の通りである。「皆のレポートを読んで一言。前回は非常に難しいケースでした。というのも、アルバイトの経験ならあるけれど、社会人になったこともないのに社会人の話、しかも働いて4年目の人の話。しかも、看護師というあまりよく分からない、身近にどなたか働いている人がいらっしやれば別ですが、一般的には理解しにくい世界の話でした。しかし、ケースが難しかった分、いつも以上によく読んだとか、グループ・ディスカッションでいつも以上に真剣になったといったことがあったようです。ただ、その中身は、社会人になったらありそうよね、4年目になったらこんなふうを考えるのかもしれないというケースでした。レポートを読む限り、皆さんそれぞれ、大切な点について考察が深まったようでした。そこで、今日のケースですが、『えっ、これだけ』という非常に短いケース、しかも大学での授業、フランス語の授業での出来事について描かれたケースです。この授業ではいろいろなケースが登場しますが、前回、今回と、非常に意味のある順序を組んであります。皆さんは、一つひとつのケースに一生懸命取り組んでくだされば、最終的にこの授業の目標を達成することになっていきます。この日のコメントは前回（前述）に比べ非常に短いものであったが、いずれにしても、一人ひとりや全体の実態に即したかたちで「橋渡し」をしながら、授業の目標達成へと向かう。

## 2-6. 「個人学習」の時間

この授業では、事前にケースを配って課題を示し予習して来させるという進め方ではなく、その日のケースはその日に配るようになっている。そして、最初に「個人学習」と称して、個々人に30分程度で二つの作業を行わせている。一つはケースの内容把握。もう一つは発言の準備。この時間は「孤独な時間」とも称して、比較的短い時間内に、誰の助けも得ずに一人でケースの内容を理解し、自分なりの捉え方、考え方をまとめる練習の場として位置づけている。実際、この時間が始まると、学生たちはまるで試験が始まったかのような雰囲気で一斉にケースを読み、初回

の授業でガイドランスした通り、アンダーラインを引いたり、余白にメモを書き込んだり、キーワード、キーセンテンスを四角に囲んだり、人間関係図や組織図を書いたりするといった作業を行う。レポートにこの「孤独な時間」のことに触れて、「一人で考えるというのは、いい意味で非常に緊張します。これですべて考え抜いたと思っても、あとのグループ・ディスカッションで必ずといっていいほど、全く異なった視点からの分析やコメントを聞かされてはっとしたり、なるほどなあと感じたり、そうかあそういう捉え方もあるのかと驚いたりします」という記述がほとんどの学生から寄せられ、学生にとってよい経験となっている。

それは、あらかじめ次のように伝えているにもかかわらず、学生たちは発見、納得、感心、驚きを経験する。その点が学生にとっては大なる学びの機会となる。「この個人学習の時間が、あとのグループ・ディスカッション、クラス・ディスカッションの成否を決めます。とりあえずケースを読んで内容をおさえておけば、あとは誰かが何かを発言したのを聞いて何かいえばよい、ではいけません。これは何度かやっているうちにわかることですが、個人学習が充実すれば、あとのディスカッションも充実します。だから、個人学習はさまざまな視点から内容を理解し、発言の用意をする一種のゲームだと思って、集中してみてください」。やがて授業の回数が進むにつれて、「個人学習っておもしろいですねえ」「何度頑張ってみても、あとのディスカッションで驚きや発見がある」と、この個人学習の時間の醍醐味を知る学生が増えていく。

さて、学生が個人学習に取り組んでいる間に私は二つのことをする。一つは、「座席表」の作成。用意しておいたA4の紙を横型に置き、学生の出席状況を、位置と名前を一人ずつ確認しながら書き込んでいく。着席位置は、学生にとって一番座り心地のよい、したがって少しでも授業に集中できるようにと、学生の自由に任せているため、欠席の学生がいたり、授業の回数が増えるに従い親しくなった者どうしが並んで座ろうと席を変える学生がいたりするので、毎回、学生の着席状況を手書きしている。そうしながら、個人学習中の学生一人ひとりの様子を、順に観察しながら、かなり集中できているようだとか、きょうのケースにはあまり興味を示していないようだといったように把握するようにする。

座席表ができあがると、個人学習のあとに予定しているグループ・ディスカッションでのグループ・メンバーの組み合わせを考え始める。毎回、これがかなり骨の折れる作業となる。出席者全員を2～3人ずつに分けたグループを二種類つくり、15分間のグループ・ディスカッションを二度行わせるのだが、ポイントは前回までとはできるだけ異なる組み合わせになるようにして、できるだけ多くの学生との出会い、そしてその結果できるだけ多くの考えや捉え方との出会いの機会をつくり、教育効果を高めるようにすることである。そのために出席学生について、前回までの組み合わせの記録をすべて振り返りつつ、新たな組み合わせを考えることになる。

最初の5回くらいは、まずは友人どうし、同性どうし、同学年どうし、同学科どうしの組み合わせからはじめ、徐々に異性どうし、異学年どうし、異学科どうしで組むが、その際、その日の

様子から比較的元気な学生とあまり元氣の見られない学生の組み合わせになるようにして後者が前者につられて熱心に取り組む機会をつくるようにしたり、前回までのディスカッションへの参加度に関する印象をもとに比較的発言のある学生とあまり発言のない学生とが組み合わせるようにして後者が前者から発言の秘訣や勇気を得られる機会をつくるようにしたりも行う。そして6～7回目あたりで、ケースの個人学習のときに課題について書かせた内容をもとに、意図的に同じ考えの者どうしを組んだり、異なる考えの者どうしを組んだりするようにしている。このような試みの結果、学生からも「毎回いろいろな出会いがあり、いろいろな考えに触れられるので、毎回楽しみにしている」との好評を得ているが、次年度では、欠席者を想定せずにあらかじめさまざまな組み合わせをつくっておき、欠席者に応じて修正を加えるという作業手順を試みることを予定している。

なお、座席指定をするかしないかについては、開講当初二度にわたり、座席の指定と非指定の両方を試み、指定時と非指定時のメリット・デメリットを比較した結果、「ディスカッションに集中できてよかった」という非指定時のメリットを確保することを選択し、座席指定をしていない。なお非常に興味深いことだが、座席非指定とすることにより、前述のように授業回数が後半になると、席の位置が変わる学生が5～6名現れる。彼ら彼女らには、この授業を通じて知り合い親しくなった学生どうしで座るようにすることによりいっそう居心地をよくした上でディスカッションに積極的に参加するという副次的効果も見られる。

個人学習の時間に私がしているもう一つのことは、前述した「きょうの目標」を見てまわることである。結果的にかなり漠然としたものとなるが、一人ひとりの目標をあらかじめ把握しておくためである。周囲の集中を切らさないよう注意しながら見てまわり、ときには両の手で握りこぶしをつくって「頑張れ」のポーズをして見せたり、具体的な記述部分を指差しながら「楽しみにしているよ」と小声でささやいたりしてまわる。

## 2-7. 「グループ・ディスカッション」の時間

グループ・ディスカッションの時間は、グループを決めて、時間を決めたら後は学生に任せている訳だけではない。それぞれのグループに学生が分かれて3～4分が経過した頃（たいてい互いの自己紹介をすませて本題に入っている頃）を見計らって、グループを一つひとつ回っていく。そしてグループの近くに立ったり座ったりして、可能な限り議論に耳を傾ける。グループによっては議論が白熱し、私が近づいても気づかないこともあるが、最初のうちはことごとく議論が中断してしまう。私が近づくと気になったり緊張したりするからだという。そこでいつもいう言葉は「僕は空気。吸えないけれど」である。学生は一瞬なんのことかと反応に困るが、やがて意味がのみこめると「存在感ありすぎですよ。やっぱり緊張します」と笑って返してくる。しかし私の「巡回」になれると、「ねえ、先生、どう思います?」「私はこんなふうに思ったのですが、そう思いませんか?」などといって、私を議論に引っ張り込もうとするグループも現れる。その場

合は、極力、私の発言がそのグループのやりとりに大きな影響を与えることがないように気をつけながら1分ほどつきあう。ただグループによっては、議論が頓挫し、沈黙状態になってしまっている場合もある。そんなグループには、どんな議論が交わされたかを確かめた上で、「この点についてはどうかな」「さっきの点についてもっと具体的に考えてみたらどうなるかな」などと、さらなる議論のきっかけとなるような質問を投げかける。またグループによっては「議論を尽くした」と平然としているところも出てくる。その場合、議論のきっかけとなることを、そのグループの議論の状態に即して与える。また毎回の授業に熱心に取り組み、楽しんでいる学生には「〇〇さん、きょうも絶好調だね」と話しかける。そうしてグループすべてを巡回し終える頃に15分が経過する。そこでもう一つのグループ編成を発表して、さらに15分間同じように巡回する。

このグループ・ディスカッションは、学生だけでなく教員の私にとっても重要な時間となる。それは、40名ほどの学生が相手となると、全員のことがなかなか見えてこない。名前を覚え、自己紹介文から一人ひとりについてできるだけの情報をもととするものの、クラス・ディスカッションで発言の少ない学生の人間理解はどうしても不十分になる。それゆえ、この時間は、そうした学生たちに可能な限り接触を図り、個人的に話しかけ、交流を深めるという機会となる。例えば、クラス・ディスカッションで一度も発言のない学生に「〇〇君、どう思う？ きょうのケース」と話しかけ、ここで学生が何を返答しようと「ああ、なるほどねえ」「つまり、～と考えたんだね」と学生の考えをすべて受け入れる（たいていの学生は、このやりとりでやる気を高め、さらに熱心に取り組もうとする）。あるいは「〇〇さん、どう？ この授業。まだ発言するのに緊張する？」と話しかけ、彼女の思いや気持ちに耳を傾ける。あるいは「〇〇君のこの前のレポート、登場人物のそれぞれの視点から考えられていてよかったなあ。あとはクラス・ディスカッションでの発言かな。練習、練習。勇気を出して、とにかく一回発言。ねっ？ いい？」と促す。ときには「それ、おもしろい見方だ。あとのクラス・ディスカッションで必ずそれを発言して。ね、いいね？」と強制する。場合によっては、「クラス・ディスカッションが始まったらすぐに手をあげて、今の話を発言して」と打ち合わせさえすることもある。

このグループ・ディスカッション中の「巡回」は、さらに別の点でも有効である。すなわち、グループの学生どうしが交流を深めるきっかけを教員から積極的に得られる機会でもある。授業中に学生個々に話しかけると、たいていの学生は他の学生の注目を一身に集めたなかで、教員とやりとりをし、何らかの返事をしなければならないので、人によってはかなりの緊張感を伴うが、少人数グループになった状態で一人に話しかけると、周囲の注目は同じグループの1～2名だけでプレッシャーも少なくすむ。加えて同じグループのほかのメンバーと関係づける話題運びをするようにして、特定の学生への話題をそのグループのメンバー全員で共有することをねらう。すると話しかけられたほうもほとんど緊張せずにすむだけでなく、同じグループのメンバーで共有できる世界ができあがり、ディスカッションがいつそう円滑に進むという効果が期待でき

る。これを繰り返すことがクラス全員の人間関係の構築の一助となり、クラス・ディスカッション時の議論の深まりを期待することができる。

### 3. おわりに

本稿で考察の対象として取り上げた7つの試みは、学生がケース・ディスカッションを通じて体験的に概念や考え方を身につけながら、本人自身が自己成長をとげていくのを支えるという重要な役割を果たすものとして意義づけられる。しかしうまでもなく、この7つがすべてではない。むしろ、7つの試みに含まれた次の二点が重要であると考えられる。

- ① 教員が学生一人ひとりのさまざまなチャンネルを模索し、「授業」という全体的な流れのなかで、学生一人ひとりの人間理解を深めながら一人ひとりの理解に即して指導できるよう試みている点。それにより、学生は、教員とともに授業内容を通じて学んだり、成長したりする機会が得られる。
- ② 教員が学生一人ひとりを他の受講者との関係のなかで捉え、同じ授業を受講する仲間の一人として位置づけ、同じ授業を受講する者として相互に交流しあうことを促そうと試みる点。それにより、学生は、受講学生とともに授業内容を学んだり、成長する機会が得られる。

これをさらに、個としての成長とクラスとしての成長と特徴づけることができる。すなわち、学生一人ひとりがそれぞれに成長を図りながら、そうした学生同士の相互作用を通じて同じ授業を受講する学生全体として成長が目指される、とまとめることができる。

なお、本稿で授業の直前からグループ・ディスカッションまでを考察対象としたのは、取り上げたいいくつかの要素が複合的かつ総合的に影響しあってクラス・ディスカッションの成否に影響を与え、授業科目の目標達成に重要な基礎となるものと位置づけているからである。

最後に今後の課題として以下にまとめ、その結果については稿を改め、論じることとする。

- ① ネームカードに学生が設定した目標の取り扱いがあげられる。現時点では、学生の積極的かつ具体的な授業参加及び参加意欲を高めるためのものとして機能しており、レポートに目標の到達度についても含めるよう指示しているが、今後は、いっそう評価しやすい具体的で明確な目標設定のあり方を学生に対して具体例をあげて指導していくようにしたいと考えている。
- ② 受講学生一人ひとりの実態に即した指導、支援がいっそう綿密になるよう、学生一人ひとりの「学習のポートフォリオ」づくりを試みたいと考えている。
- ③ 教育効果をいっそう高めるために受講者数の再考も検討事項に含めることがあげられる。現在は40名を定員とし、実質30余名の受講者がいるが、教育効果を高めることを追求するならば25名定員、30名定員、35名定員を検討することも一つの選択肢であるかもしれない。

## 資料1 初回の授業で配布するオリエンテーション資料内容

### (I) 授業について

- ① 個の授業では、問題を発見する力、分析する力、解決する力や、自らの考えや感情を表現する勇氣とほかの人の考えや感情を尊重する思いやりを養い、ケースという他人事の中に「自分事」を見いだし、自己理解、他者理解、そして他者理解を通じた自己理解を深めることを目標とする。
- ② 個の授業では、「よく読み、よく聴き、よく考え、よく話す」のでなければ成立しない。それには、かなりのエネルギーが求められるが、実行すれば上記の目標は必ず達成されるだろう。
- ③ 11分以上の遅刻も早退は、授業の雰囲気を壊し、進行の妨げとなるので、欠席扱いとする。
- ④ 毎回、その日のディスカッションに基づいたレポートの作成を宿題とする。提出期限は、原則として同じ週の木曜日午後2時40分とする。単位認定にあたっては、このレポートによる評価が全体の40%とし、あとの60%は授業への参加状況、貢献度にもとに評価する。なお、授業に出席してもレポートを期限通りに提出しないことや授業に欠席してレポートだけを提出するのは認められない。いずれも欠席として扱う。
- ⑤ 欠席は7回の授業日のうち2回（ただし初回と最終回を除く）は認められるが、減点の対象とする。なお、4年生の評価基準は別途定める。

### (II) 授業の特徴

- ① ディスカッション形式をとり、積極的、能動的な参加態度、学習姿勢が求められる。
- ② ディスカッションには、唯一絶対の「正解」や「結論」はないことを前提とする。
- ③ グループ・ディスカッションでは、グループとしての結論や意見をまとめるのではなく、各人の考え、意見、感想、疑問を出しあい、お互いの考え等を深めあう機会とする。
- ④ 全体のディスカッションでは、グループで話し合った結果をグループごとに発表する場はなく、個々人の発言の積み重ねを行う。
- ⑤ ディスカッションでは、個々人が一定の考えや意見に固執するよりもむしろ、多様な考えや意見をよく聴き、自らの考えをさらに深め、発言することが求められ、柔軟で創造的な学習活動の場となることが期待される。

### (III) 授業の日程と内容

- ① 4月10日 オリエンテーション & ケース「孤立する男子学生」
- ② 5月1日 ケース「無人島に持っていくもの」「かつこいいとは何か」
- ③ 5月15日 ケース「辞めるべきか続けるべきか」
- ④ 5月29日 ケース「4年目看護師の悩み」
- ⑤ 6月12日 ケース「フランス語の授業」
- ⑥ 6月26日 ケース「トムとステイプ」

## ⑦ 7月 3日 ケース「価値観がちがう」

- \* オープンクラスウィークの日程が発表されたら、それに合わせて授業日程を変更することもあります。変更の場合は、授業中及び本部棟前掲示板にてその都度知らせます。

## (IV) 授業の進め方

## 3 限目

- 1 3時05分 開始（13時までに着席しておくのが望ましい）
- ～13時15分 前回の復習
- ～13時55分 ケースの配布と個人学習  
臨場感をもってケースを精読する。登場人物、状況、問題等を把握する。課題について個々人の考えを用意し、発言の準備をする。
- ～14時30分 グループ・ディスカッション

## 4 限目

- 14時45分 授業再開
- ～16時 全体ディスカッション
- ～16時10分 宿題の発表

\*13時11分以降は遅刻として入室を許可せず、欠席として扱うので注意すること。

\*3時限目と4時限目の間に休憩をとるが、4時限目の開始時刻に遅れた場合も遅刻とし、その日は欠席扱いとするので注意すること。

\*この授業に関して何か聞きたいこと等があるときは、以下のアドレス宛にメールで連絡してください。Norihiro\_Nishio@red.umds.ac.jp

## 資料2 ネームカードによるコミュニケーションの事例

## 事例1 小林大地（仮名、以下敬称略）の場合

小林は2年生。最初の授業からこの授業形態を楽しみ、熱心に取り組む一方で、グループ・ディスカッションにおいて「全く面識のない相手に自分の意見を以下に理解してもらえるよう話すか」、「互いに考えを出しあったあとさらに新たな考えや見方・捉え方を見いだすこと」の難しさに悩んだ。クラス・ディスカッションにおいては、「かなり考えを深めたにもかかわらず必ず新しい発見」があり、そのことを悔しがっていた。また、「手を挙げて発表するという単純な作業でもかなり緊張」していた。そのために、「自分の言いたいことはあってもそれを発表できない」もどかしさを強く感じていた。

4月10日

西尾： A++ 小林君、よろしく。一回の授業で、今後実現すべき課題がいろいろ得られたよ

うですね。今後の成長を楽しみにしています。

5月1日

西尾： ④++ 「他の人の意見にも自分なりの意見を良い意味でぶつけていったら、視野が広がり相手にも自分にも良い影響をもたらす」＝とてもよい経験ができたようですね！よかった！ 次も楽しみです。レポート、とてもよくまとめられていました！

5月15日

西尾： ④++ 一つの結論を下したり、「～すべき」「～したらよい」と考えたりするよりも、いろんな視点から考えることがもっと大切。考えが変わることは、だから、OKです！ところで、発言おめでとう。よかったね。今後もどんどん聞き、考え、発言しよう！

5月29日

小林： 「今日の目標」一回は自分の意見を発表して、次に、さらに人の意見を聞いて、もう一回発表する。

西尾： ④+ レポートに注がれた時間とエネルギーに感服。全体的によくできていました。ただ、②の課題で、主人公に対する見方なり分析がよくまとめられていたものの、やや突き放した冷たい目（小林君の）がチラチラと感じられ、怖かったなあ。発言は目標どおりにできなかったようだけど、頑張って！

6月19日

小林： 「今日の目標」グループ・ディスカッションの時に相手の意見をよく聞き、それに対して自分の意見を相手に伝えきる。そこから全体の発表でのよい材料を見つけて発表する。

西尾： ④++ 授業中の集中度やレポートの充実度はすばらしい。あとはディスカッションで「完全燃焼」することかな。レポート＝まとまりすぎて見方が絞られすぎている点が残念。「～かもしれないし、～かもしれない」と、もっといろんなふうを考えるようにしてみてください。

6月26日

小林： 「今日の目標」できるだけ多く発表して、完全燃焼する！

西尾： ④+++ 目標を達成できず「自分の心の弱さ」を反省したようですが、その分、最終回では大活躍してくださいね。レポートの②＝上司から部下に一方的に説明するという点は残念だった。一生懸命にまたは熱心に説けば説くほど、部下に「そんなに私をあ部署に異動させたいのか」というネガティブな思いを持たせて、結局ケースと同じ事態を招きかねないから。ただ、全体的にはたいへんよくまとめられていました。「すばらしい」の一語に尽きます。

以上の過程を経て、小林は充実したグループ・ディスカッションの時間をもつようになってい

った。また、クラス・ディスカッション中に手を挙げて発言することに少しずつなれると、自分とは異なる視点、捉え方を得ても、悔しがることがなくなり、むしろ喜ぶようになった。そして最終レポートでは、「多くの人の前で自分の意見を発表する。ただこれだけでも自分にとって大きな自信となった。勇気を出して手を挙げ発言するという経験をして、今後も何かのときに勇気を出して自らの力で乗り越えていく自信がついた」と記している。

(b) 中山優子（仮名、以下敬称略）

最初の授業で、中山は学生主体のディスカッション方式を「大学ならではのすごい授業」「楽しい」と思う一方で、他の学生の発言に「なるほど」と思うことが多く、圧倒され気味であった。しかしながら、この授業を楽しみつつ、そこから得られることは大きいと直感した彼女は、「恥ずかしがりやだけど、積極的に考えを発表していきたい」と記していた。

① 4月10日

西尾： A+ 中山さん、よろしく。楽しみながら、一つひとつが練習だ、チャレンジだと思って取り組み、成長につなげていってくださいね。楽しみにしています！

② 5月1日

西尾： ④ 二つのケースを通じて、それぞれが自分の考えをしっかりともち、他の人の考えをしっかりと理解する機会が得られたという点で、中西さんにとってとてもよい経験になったようですね。次回以降のディスカッションに是非活かしてくださいね！

③ 5月15日

西尾： ④— 辞めるか続けるかだけでなく、主人公のアルバイト問題を通じて、いろんなふうを考えられていてよかった。ただ、もっと具体的に書けていたらもっとよかった。次を期待しています！

④ 5月29日

中山： 「今日の目標」自分の意見はもちつつも、他人の意見も理解する。

西尾： ④ 疑問がたくさん出てくることは素晴らしい！ 今後も「ああだ」「こうだ」「こうすべき」で片づけずに、疑問をたくさんもち、考えを深めるようにしましょう！レポート、全体的によくできていました！ 発言も大いに期待しています！

⑤ 6月19日

中山： 「今日の目標」自分の意見をちゃんと持つことはもちろん、その反対の意見も自分で理解する。

西尾： ④ 全体的にバランスのとれたレポートでした。もっともっとこの線で考察が深められていけばもっとよくなりますよ。発言もどんどんトライしてくださいね。楽しみにしています。

## ⑥ 6月26日

中山： 「今日の目標」原点に戻って、個人学習の時間に今まで以上に深く考える！！

西尾： ④++ 発言することのすがすがしさ、うれしさを実感できてよかったね。おめでとう！！ 個人学習の成果かな。今回のレポートもよくできていました。ただ、「もっとお互いの本音で喋ることができたなら」って具体的にはどういうこと？ その点について詳しく知りたかったなあ。最終回も期待しています！！ 思う存分楽しんでください！

以上の過程を経て、中山は、1200字のレポートをまとめるのもかなり苦労していた1年生だったが、最終レポートでは2000字以上にわたり非常にまとまりのあるレポートにしあげられるようになった。「人と意見交換することのすばらしさ」「いろんな考え方や感じ方を知り、世界が広がる楽しさ、すばらしさ」を知ったり、「他人の意見を理解することの大切さ」を学んだりした。そして「発表する勇気」を得たという。最初は他の学生たちに圧倒され気味だった彼女が、勇気を出して発表するようになり、今後別の場面でも「自分から進んで発表のできる人を目指す」と記していた。

**参考文献**

- ① 京都大学高等教育教授システム開発センター編『開かれた大学授業をめざして』玉川大学出版部、1997年
- ② 京都大学高等教育教授システム開発センター編『大学授業のフィールドワーク』玉川大学出版部、2001年
- ③ 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー』東京大学出版会、2005年
- ④ 高木春夫『慶應ビジネススクール高木春夫教授のMBA授業 Live[リーダーシップ論]』中経出版、2002年
- ⑤ 高木春夫『慶應ビジネススクール高木春夫教授のMBA授業 Live[マネジメント論]』中経出版、2002年
- ⑥ 加藤幸次・安藤輝次『総合学習のためのポートフォリオ評価』黎明書房、1999年